『恐れずに迎えなさい』（マタイの福音書 1 章 18-25 節）2021.12.12.

<はじめに> クリスマスは救い主イエスの誕生を祝います。今や世界中で祝われるクリスマスです。救い主の誕生当時、それを知った人々は歓喜して歓迎したでしょうか。救い主がもたらす救いが実現するとき、それに立ち会った人々は感動して感謝を表したでしょうか。聖書に事実を見ましょう。

Ⅰ　イエス誕生の物語

①婚約中の発覚(18-19)

ヨセフとマリアは婚約中でした。ユダヤでは婚約期間から夫婦と見なします。その間にマリアは、御使いが彼女に告げたとおり(ルカ 1:26-38)聖霊によって身ごもります。やがてそれをヨセフも知り、彼はマリアを法廷でさらし者にするよりは、内密に離縁しようと考えます。

②主の使いが夢に(20-23)

ヨセフがこのことを思い巡らしていたのはなぜでしょうか。その中で、彼に主の使いが夢に現れ、恐れずにマリアを妻として迎えるように促します。そして、マリアの懐妊は聖霊によるもので、生まれる子は男の子、名をイエス(=主は救い)とするように告げます。

③決心と行動(24-25)

眠りから覚めたヨセフは主の使いが命じたとおり、マリアを自分の妻として迎え入れます。彼はすべてが理解でき、恐れが消えて納得したのでしょうか。やがて子が生まれ、イエスと名付けます。こうしてイエスはヨセフとマリアの両親のもとで生まれることになりました。

Ⅱ　ヨセフの葛藤と恐れ

①ヨセフの苦悩(19)

ヨセフは自分に身に覚えのないマリアの妊娠をどのようにして知ったでしょうか。彼の苦悩は計り知れません。ユダヤの律法では婚姻以外の不貞は両者を石打ちの刑です。暴行を受けたとしても、それを立証しなければなりません。いずれもマリアをさらし者にします。

②ヨセフが抱く恐れ(20)

愛する婚約者を苦境に陥れることは身を割かれる思いです。だからと言って、黙って彼女を妻として迎え、その子を抱き、育てて行けるでしょうか。周囲の眼差しも気になります。結婚は神と人に喜ばれ、祝福されるべきなのに、この結婚がそれにふさわしいのでしょうか。

③正しい人として(19)

ヨセフはマリアから直に話を聞けたでしょうか。彼はマリアを大切に思うことと、自ら正しくあろうとすることで葛藤し、ついに離縁しようとします。どうしても婚前妊娠した婚約者を妻として迎え入れることはできないと考えたからです。これが彼の中のベストでした。

Ⅲ　決断へと導くもの

①神は働かれる

主の使いも夢も不思議ですが、神が介入される超自然的な方法です。女性の妊娠は自然なことですが、「聖霊によって身ごもる」ことは理解し難いことです。このことをマリアにもヨセフにも説明抜きで同じように神は示されました。このことは神から出たことだと。

②神は計画し、実現される

ヨセフとマリアに神が語られたことは同じです。二人の証しは真実への指針です。神からの唐突と思える不思議は突然起こったのではありません。預言者の言葉(22-23)は、古からの神の計画が今、実現したことを示します。ヨセフは神の言葉を信じ、従いました。

③決断の後で見えるもの

正しいヨセフが律法を超えて妻を迎えたことは、救いが律法にまさる証しです。罪悪の実と思えた子を我が子として迎えたことは、救い主が民をその罪から救い、聖霊によって新しいいのちが与えられ、神の子どもとしての特権を与えることと重なります。

<おわりに> 救い主の誕生に戸惑い恐れるヨセフは、救い主を信じ、受け入れ、従うことにためらい、悩み恐れる私たちにも通じます。しかし、聖書は「恐れずに迎えなさい」と力強く言います。数々の証しとしるし、神の私のために立てられている神の計画もそれを支えています。(H.M.)